山本正志のベトナム訪問記

2005 年 12 月 23～30 日

１２月２４日

午前６時１５分、シャトルタクシーで我が家を出発、東山区の長崎さんを迎えに。そして一路関西空港へ。集合ロビーでは添乗員を務める国際ツーリストの富田秀信さんが待っている。藤本文朗・貞子夫妻も到着、いよいよ出国手続き。ベトナム航空機はなぜか１０分早く１０時２０分に離陸、機内で昼食とビールにワイン。

ホーチミン市のタンソンニャット空港着陸は午後４時（現地時間午後２時）、５時間あまりのフライト。天候は曇り。日本の冬はベトナムでは乾季となっているので暑いくらいだがすごしやすいという。

入国手続きを終えてロビーに出ると、「藤本先生！」と呼ぶ声がして、早速花束が贈呈される。みればドクちゃんが松葉杖で駆寄ってくる。ツーズー病院のタン先生も空港まで熱烈な歓迎のお出迎え、みんなで記念写真におさまる。とりあえずバスでキムドホテルへ。通訳・案内は若者のテイさん。ホテルのロビーでとりあえずの自己紹介。今回の旅行の参加者は大阪健康福祉短大の藤本先生をはじめ、白井先生、古川先生や、研究者、リタイヤ組、学生も３人参加。私たち二人は娘の勤める短大ということもあり、私が藤本貞子さんとは京都市会議員として同僚であったこともあって今回初参加となった次第。

ホテルの部屋では日本のＮＨＫの国際放送がそのまま受信できる。外国に来たような気がしない。４時３０分からは自由時間、すこし外出して買い物を、と裏通りにはいると道路の両側ににぎやかな露店がズラーッと並び、（写真左） 何でも売っている。人とバイクが入り乱れ、おまけにひどい雨ふりとなって収集もつかない。バドワイザービールを買ったが５本の缶で１０万ドン（約１０００円）まあこんなものか。

夜７時から近くのレックスホテルの５階レストランで夕食。舞台ではベトナム楽器の演奏と鮮やかなアオザイ姿の踊り子さん４人が次々とレパートリーを披露。あっという間に２時間がすぎて、ホテルに帰ろうとするのだが、なんと人とバイクの大洪水。信号もなにもあったものではない。どこからこ

んなに人々が沸いてくるのか、と思うようなラッシュだが、きけば目的があってバイクで走っているのでなくて、イヴの夜だからということらしい。まったく陽気な民族だ。夜のバイク洪水はイヴの夜だけではなかった。毎晩のように大通りは２人乗り、３人乗り、最高は５人乗りまで見かけたが、バイク、バイク、またバイク。

　ベトナムのバイクは日本のホンダのスーパーカブ型でそれ以上の大型バイクはない（例外は白バイ）。シートが長めにつくってあり、これなら４人は乗れるかもしれない。しかしなんでまたこんなに夜になるとバイクが？？と思ってたずねると、「夜になっても暑いし、家は狭い、ということで若者は恋人をのせて街中ツーリング。バイクがないと恋人ができない。家族も一家で夕涼みのバイクツーリング」ということらしい。しかし、通行人にとっては大通りでも信号がついていないホーチミン市内では、道を横断するのは決死の覚悟。最初はこわごわ歩を進めるが、バイクのほうで直前で避けてくれる。そのうち度胸で渡れるようになった。

２５日

　ホーチミン市２日目、朝食の後早朝の散歩、サイゴン川が近くなので二人で足を伸ばす。途中に日本総領事館。今日午前中は戦争証跡（犯罪）博物館。（写真右）アメリカ軍の戦闘機や戦車、戦闘ヘリ、甚大な被害を与えた６㌧爆弾など、１階展示室にはベトナム戦争当時新聞や写真集で見たアメリカの残虐な爆撃、村びとを容赦なく襲う戦車、火炎放射器、負傷した子供たちの写真、殺害を競う米兵... 博物館は展示は１階のみで２，３階は建築中とのこと。１階会議室でバン副館長と戦争経験のあるチューさんのお話をうかがう。チューさんはアメリカ軍の制圧下にあったサイゴンで文化情報局に地雷をしかけて破壊したという戦士。ガンだと診断されたが、自転車でハノイまで出かけて「ホーチミン様の廟にお参りをしてきたが往復５ヶ月かかった」という。今でも戦争時代の被害で左手は不自由だというから、その決断力やすごい。ともかく「ベトナムでは圧倒的に女性の方が強い」らしい。バン副館長から知事選挙出馬要請されている衣笠洋子さんへのメッセージの色紙をよせてもらう。（この色紙は１月６日民主府政の会新春レセプションで衣笠洋子さんに手渡すことができた）

　その後、ツーズー病院にむかう。この病院は産婦人科の大きな病院だが、アメリカの散布した枯葉剤の影響で発生した奇形児の誕生という悲劇に直面し、一体として生まれたベトちゃんとドク

ちゃんの分離手術に成功、その後ドクちゃんは元気に成長、今回もバイクに乗って空港まで出迎えてくれた。ベトちゃんはいまでもベッドに横たわって、会話もままならないし、食事や歩行も自分では不可能、話しかけても表情では分かるが体も動かせない。もう２４歳だという。

ベトちゃん･ドクちゃんのこと

手術前のベトちゃん･ドクちゃん

1981 年 2 月 25 日　ベトナム中部高原ザーライコントゥム省サータイ地区で結合双生児として生まれ、ハノイのベトドク病院に収容される。1988 年 10 月 4 日ホーチミン市ツーヅー病院で分離手術を受ける。右足はドクちゃんに、左足はベトちゃんに。藤本文朗先生は「ベトちゃんドクちゃんの発達を願う会」を結成、当初から代表として奔走してこられたが昨年オムロンヒューマン大賞を受賞された。

病院訪問にあたって、日本側から贈り物、藤本貞子さんのスーツケースにはいっぱいのベトちゃんの必要とする医療用パイプ（排泄用）が山のように積み上げられた。

藤本先生夫妻とベトちゃん

食事の後、入所しているこどもたちとの交流。自由にベッドの近くまで入ってベトちゃんの撮影も自由。このあたりは日本とは事情が違うのか、藤本先生のミッションだからなのか。

やがて３階の階段をあがったところに椅子をすえ、子どもたちへのクリスマスの贈り物。ケーキやおもちゃ、最後は日本側による昨夜特訓の、これも大成功で、子どもたちは大喜び。病院の一角、障害児の施設がツーズー病院「平和村」でその庭に棚橋先生たち（元朱七保育園長）が贈ったプールも。

マジックに見入る子どもたち

病院を後にして、一行とは別に翌日のホーチミン幼児師範学校訪問の打ち合わせに、同志社大卒業でベトナムに来て５年、この地で障害者雇用の「さくらカフェ」を開業している江崎ちさとさんの店に立ち寄る。日本からの多くの募金も寄せられ、壁にその人たちの名前があった。江崎ちさとさんは１９９４年はじめてベトナムを訪問して以来、ヤーデイン障害児学校卒業の子ども達の働く場所を作りたいという夢をあたためていたが、その夢が実現、今２００４年４月ホーチミン市にさくらカフェがオープンした。

さてホテルに帰って夕食の前、「明日の幼児師範学校の生徒たちの前で披露する合唱の練習をします」ということで１０１号室に集合、「赤とんぼ」とスマップの「世界に一つだけの花」の練習。スマップの歌には手話をつけるというから大変。やっと練習が終わって夕食。バスでレスト

ランへ。明日はどうなることやら。

２６日

幼児師範学校の月曜朝礼

今日は６時３０分に集合。７時からのホーチミンに参加するためだ。（ベトナムでは月曜の朝礼はすべての学校で行われる）

学校の門を入ると次々に真っ白のアオザイ姿の女生徒たちが次々と登校してくる。どうやら月曜午前の朝礼の時は「制服」ということになっているらしい。実習に行っているので半分の生徒しかいませんとチュック学長先生。広い庭で朝礼の開始となる。代表が舞台に上がってまずは国歌と国旗掲揚、舞台にはホーチミン主席の像が。やがて生徒代表によるスピーチ（一週間の政治向？）があり、なにやら（クラスごとの成績などらしい）表彰があり、続いてこちらの学生３人が登壇、ベトナム側代表との間で交流討論が開かれる。聞いていて「ベトナムの女生徒たちは自分の勉強や卒業後のことなど意見発表にしてもしっかりしている」と思えたが、教育の違いか？次はいよいよ日本側おとなたち（主に教員とスタッフ・その他）による歌の（赤とんぼとスマップの世界に一つだけの花）プレゼント。そしてベトナム側教員による（生徒たちも合唱）歌の交歓。

再び教室に戻って互いに自己紹介、その後教室の授業風景を視察。子どもたちのためのお遊びの教材の作成中のようだった。授業を見た後、教室で両校のとなる。

学術交流協定の締結式

ベトナム側の話によると、幼児師範学校の主な課程は児童教育・保育となっているが、藤本文朗先生の努力と教え子たちのがんばりで障害児教育・障害者福祉の課程も前進しつつあるというお話。今後は日本ほどには高齢者問題は深刻な事態に直面していないとはいえ（戦争の結果、高齢者の男性は極めて少ない）これから高齢者福祉の担い手の養成が急務となってること、そのための課程を準備しなければならないことが強調された。

この間の通訳は江崎ちさとさんにしていただいた。彼女のベトナム語は現地の人とまったく変わらないほど流暢、さすが。なごやかな懇談が終わって２階の教室でスタッフ手作りの昼食をいただく。見ると教室の女生徒たちはアオザイではなく、中にはジーパン姿も。やはりその方がリラックスできるということなのか。学校見学・交流を終えて江崎ちさとさんのさくらカフェで休憩。ホテルに帰る組と「水上の人形劇」を見たいという組に分かれたが... いざ人形劇をやっている博物館に到着すると、月曜日は休館だった。通訳のテイさん「猿が木から落ちました」というこ

とで、一同爆笑。

ホテルに帰って一休み。夕方は本格的な土砂降りで雷も。その中をバスでレストランへ。今夜は日本側の招待で幼児師範学校の代表も参加される。にぎやかな交流会となり、自由ベトナム行進曲やワルシャワ労働歌など飛び出して、６０年代、７０年代の組が大いに盛り上がる。しかし２０代、３０代にはあまり通じなかったかもしれない。この場で午前中、短冊に絵を書いていたクラスから、一人一人あてに絵と日本語（日本側がそれぞれ書いた一言）を入れた色紙の冊をいただく。（私のは「一人は万人のために、万人は一人のために」と書いた）大いに交流を深め、閉会となってホテルへ。

２７日

今日はベトナム戦争の時期のクチの地下トンネルへ。

バスの中でのテイさんのお話では、ホーチミン市の人口は約７００万人、バイクの台数は３００万台。とにかくバイクがなければ生活は成り立たない。第一、バイクなしでは彼女ができない。日本製のバイク、特にＨＯＮＤＡは人気があり、高額だという。安い中国製バイクが多く、なかには粗悪品もあり「走っていて前輪がはずれた！」事故もあったとか。
住居は都市部では高額でとても購入できる値段ではない。小学校は義務教育で国家が保障しているが、それから上の学校、特に大学進学などは非常に「狭き門」で（まだ大学が少ないという事情もあると思うが）家庭での進学熱は相当なもの。名門の（富裕な）家庭では息子が受験に失敗したらまさに「一家の恥」となり「一週間は父親に厳しく叱られ続け」だという。

地下トンネルの入り口

クチはホーチミン市から北へ６０㎞、カンボジアとの国境とのなかばにあり、　ベトナム戦争期、南ベトナム解放軍がアメリカ軍の目を逃れるために掘った秘密軍事施設「クチトンネル」はこの町の地下にある。全長２５０㎞に及ぶそのの内部構造は　複雑かつ精巧で、トンネルの大きさを体の小さなベトナム人にしか通れない大きさにしたり、無数のトラップで敵の進入を妨げる仕掛けもつくられていた。この両足で踏みしめている地下に圧倒的な武器を持つアメリカ軍としぶとく戦いぬいた解放民族戦線のトンネルが網の目のように掘りぬかれている。林のなかの展示場には手作りの罠や落とし穴の模型が展示されていたが、表面を枯草で覆われるとまったくわからない。しかも竹を削ったり、鉄製の槍先には猛毒が塗られていたというからアメリカ兵にすればまさに

戦々恐々であったに違いない。

実際のトンネルに入ることになった。とても立っては進めないどころか、四つんばいにならなければ前に進めない。真っ暗な中での進退窮まった状態で明かりはまったく見えない。とにかく明かりの見える出口までは腹ばいの状態で抜け出さなければと必死になって前進、やっと上に明かりが。それでも３０ｍ ほど進んだだけ。これで穴の中で正面から、側面や後方の穴から襲われたらどうなるか！　決して穴の中までは入らなかったアメリカ兵の恐怖が肌で感じられた。もっとも彼らは身体がでかいので入ったとたんに身動きできないだろうが。

ふたたび市内に帰って少し遅い昼食。高層ビルの１５階。希望者だけを見ようということで博物館の中の劇場（プール）へ。周りが観客席となっており着色された水面がなにやらあわ立って、出てきたのはかわいい龍と水鳥、漁師と魚の格闘も。じつにかわいい人形劇だった。

水上人形劇

ホテルにかえって一休み。少し早い夕食は中華飯店。その後アオザイショウということで会場に。最後に登場したのはなんと石の楽器、これを木槌でたたくとカンカンという乾いた金属音の楽器となるから不思議。

２８日

ティーゲ養護センター高齢者施設訪問。ティーゲ養護センターは１９９６年に創設され、別荘風の貯まいでゆったりと感じられた。ここはベトナム戦争時代、戦死した者の家族（親たち）が功績を認められ、国家によって手厚く老後を保障されている施設。それぞれの棟に住む人たちはゆっくりとした個室（あるいは二人室）で、トイレも個室に。食事は食堂でもいいし、個別に自室に持ち帰ってもいい。ただし、症状が重くなってここでの生活が無理になった場合は医療施設や別の施設に移動となるという。別棟では昨日亡くなった８０歳の男性のお葬式が（ベトナム式で）行われていたので、一同お参りをさせていただいた。今日のお昼は富田さんの提案で「日本食を」と言うことになり、寿司店で。

ティーゲ養護センター

午後は少し市外からはなれたタンロック老人・障害者保護養護センター訪問。郊外にある老人・障害者保護養護センターは老人・障害者・孤児など、身寄りがない人達が入所している。入所者は６０２人、そのうち７０才以上の老人が１７２人、障害をもっている人が多く、副施設長

タンロック老人･障害者保護養護センター

さん（男性）の話では、国家によって一人月額１５万ドンの支援があるが職員の手当てなどはとても小額で人数もそんなに多くないという。「今何が必要か」との問いかけに「浄水器がほしい。衛生上も今は良くない」と答えた。さすがに「いくらで買えるんですか」という質問はできなかったが、参加者としても悔しい思いがした。施設を見せていただいたが、大きな講堂のような建物に剥き出しのベッドが（お布団もなく）並べられ、じっと座ったままや横になった状態で我々を見つめる目。ちょうどベトナムの支援団体だろうか、各人にお菓子や食べ物を配っていたが、ここは身体の自由がきく人たちの施設だという。しかし、入所者の表情は暗くなかったし、あいさつをすると歓迎してくれた。
ホテルに帰って一服し、夕食は中華。さて今夜はみんなで作ったアオザイの着用してのお披露目。

２９日

今日でベトナム最終日。今日は二手に分かれて、一隊はベンチェメコンデルタのクルーズ。別の集団は藤本先生とともにツーズー病院再訪。私はメコンデルタへ。
バスで１時間４０分、船乗り場に到着。メコン河は中国チベット高原に源流を発し、カンボジアを下り、ベトナムから南シナ海へと続く４６００㎞の大河。まずは小さな遊覧船にのって Unicorn 島に上陸、ココナツキャラメルの製造工場見学。といってもココナツやしをしぼって果汁を取り出し、煮詰めてキャラメルにして型に押し込んで包丁でキャラメルに切り分けるだけ。１箱１ﾄﾞﾙ、６箱で５ﾄﾞﾙ。途中の休憩のレストランでお茶と果物のサービス。ここに大きなニシキヘビが。「首に巻くと縁起が良くなる」ということで升井先生が挑戦、「ひやりとして肌触りがとてもいい」とか。次の休憩所ではかわいい女性歌手のサービス「幸せならてをたたこう」と「蛍の光」。いよいよ小船で、４人乗りの小船で漕ぎ手は前後二人。ちょうど近江八幡の水郷めぐりのような形で濁った小さな運河の両側は生い茂った龍の木。

運河めぐり

食事は船着場近くのシーフードレストラン。まずは大きなエビのから揚げ、もっとも皮をむくと小さなエビになってしまったが。つぎは ElephantFish のから揚げ。

再びバスで市内のホテルへ、いよいよ帰国の準備。まずはホテルのチェックアウト、夕食は近くの中華飯店。ここはとてもにぎやかで客の中には中国人家族もたくさん。今でも「ベトナム（特に南）経済を握っているのは中国系」と言われるくらい華僑が根を張っているという。彼らには

彼らの経済哲学があり、彼らの世界があり、ベトナムが、特にホーチミン市など南側が「これのどこが社会主義？」と思われるくらい自由経済（と地下経済も？）が根強く庶民生活に浸透していることを改めて感じた。昨年 3 月中国杭州・寧波・紹興を京大上海センターの大西広先生たちと訪問したが、やはり中国は中国。どの機関、会社を訪問しても中国共産党の指揮系統の明確なことを認識させられたが、今回のホーチミン市ではそういう場面はまったくなかった。（私が感じ取れなかっただけかも？）。

食後は午後 11 時過ぎのフライトまで時間があるのでとなっ
から空港へ。空港でテイさんとお別れ。午後１１時４０分離陸。少し眠ったかな、と思ったら明け方の関西空港に着陸。無事京都の自宅へと帰りついた。年末の色々多忙な時期ではあったがとても有意義な旅行であった。

お世話になった皆さん、ありがとうございました。

サイゴン川クルーズ

＜感想＞ 今回、藤本先生のお誘いをうけて旅行に参加させていただいたが、振り返って、実り多い旅だったと実感している。毎年のロシア旅行（昨年はウクライナ、ヤルタ・オデッサ）、昨年３月に訪ねた中国（杭州・寧波）ともちがう独特の町の雰囲気、活気があったように思う。温暖な気候もあると思われるが、人々の生活が明るい（豊かとはいえないが）。

施設を訪問し、田舎へのバスの中からも市民の暮らしを観察することができ楽しかった。

そして、特にツーズー病院では胎児の標本など見せていただいたが、幼児師範学校との交流でも藤本文朗先生の（短大関係者の）これまでがんばってこられた実績の大きさを痛感した。